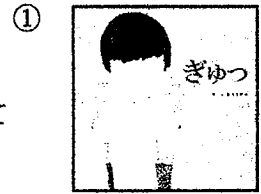


今回はオノマトペ絵本をテーマにと思ったのですが、あまりに膨大な物量に気後れしてしまい、結局読み比べをしていただけたら-という趣旨で、同一テーマ絵本をラインナップしてみました。お気に入りの一冊が見つければ幸いです。 (京都 YWCA 親子ライブラリー 橘まゆみ)

① 「ぎゅっ」ミフサマ 作 (BL 出版)

主人公のまーくんがたくさん「ぎゅっ」と共に成長していく姿が愛情込めて描かれていて、ストレートに心に響きます。



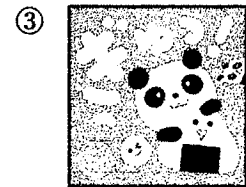
② 「ぎゅっ」ジェズ・オールパラ 作 (徳間書店)

言わずと知れた(?)有名人気絵本。言葉少なに、絵が物語る代表格です。



③ 「ぎゅっ！」かしわらあきお 作 (ひかりのくに)

パンダちゃんがぎゅっするとさあどうなる-と問いかけながら進行します。様々なものに変身する姿が、オノマトペで表現されています。



④ 「ぎゅ〜っ！」いしづちひろ 作 / くわぎわゆうこ 絵 (くもん出版)

赤ちゃんの日常を見やすい絵とシンプルなオノマトペで構成しています。



⑤ 「ぎゅうって」さいとうしのぶ 作 (ひさかたチャイルド)

ハグのぎゅうって、子育ての根源なんだよね-と思わずつぶやいてしまう、私の大好きな絵本です。

⑥ 「ぎゅうってだいすき」きむらゆういち 作 (偕成社)

単純な仕掛け絵本で、子ども自身が繰り返し操作して楽しめます。

⑦ 「ぎゅう らう らう らう」おーなり由子 文 / はたこうしろう 絵 (講談社)

初版からたった5年で10刷発行というところからも、人気のほどが伺えます。

⑧ 「ぎゅ らう らう」駒形克己 作 (角川書店)

たっぷりの余白に鮮やかなカラーリング、穴あきページの工夫、そしてオノマトペの構成-と、シンプルなデザイン絵本の印象です。



⑨ 「ぎゅっ らう らう」いしづちひろ 文 / よしのあきお 絵 (Benesse)

あなたはわたしのたからもの-この最終ページのメッセージが全てを語っています。

⑩ 「ぎゅ らう らう らうのぎゅー」森あさ子 作 (ひかりのくに)

映像美術出身の作家さんで、キレイな色使いとテンポ感はさすがです!

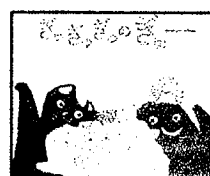
⑪ 「ぎゅうぎゅうかぞく」ねじめ正一 作 / つちだのぶこ 絵 (すずき出版)

まさに昭和の商店街の大家族を懐かしく想う、温もりいっぱいの絵本です。



⑫ 「ぎゅうぎゅうどうぶつえん」井上洋介 作 (芸術新聞社)

色調はダーク系、決して見やすいとはいえない文字配列に独走的なオノマトペ...。⑦ まさに[井上ワールド全開!]という感じで、とにかくパワフルです。



⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

## 6月と言えば、やっぱりかえる！！

真弓美矢子（個人会員）

私はかえるが大好きです。なぜ好きになったのか、きっかけは随分昔ですが、ある日ベランダの花に水やりをしていました。植木鉢の中に小さなかえるがいるのを発見したのですが、構わずじょうろの水をかけてしまいました。すると逃げるどころか、気持ちよさそうにじっとして水を浴びていました。なんてかわいい！かえるに親しみを感ぜました。それ以来のかえる好きですが、それは絵本の世界にも及んでいます。

かなり有名なかえるはアーノルド・ローベルのがまくんとかえるくんシリーズでしょう。『ふたりはともだち』（文化出版局 1972）所収の「おてがみ」が小学二年生の教科書に載っていますから。特にお勧めは『ふたりはいつも』（文化出版局 1977）所収の「おちば」です。季節は秋なのですが、木の葉がみんな散ってしまい、がまくん、かえるくんそれぞれが相手の庭の落ち葉をきれいにしようと思いつきます。すっかりきれいになり、意気揚々と帰っていくのですが、その後風が吹いて結局元の落ち葉だらけの庭に戻ってしまいます。掃いて集めた落ち葉をそのままにしていたんですね。家に帰った二人、今度は自分ちの庭をきれいにしようです。その晩ふたりは、相手が庭を見てどんなに喜んだだろう、その思いに満たされ眠りにつきました。自己満足ではありますが、純粋に相手が喜んでいだろうということだけに満足できる、お掃除が完璧ではなかったことも含め、ほんとうに子どもらしいストーリーだと思います。



かえるを飼うとしたら、いったい何年くらい生きるのでしょうか？『アマガエルとくらす』（山内祥子 文 片山 健 絵 福音館書店 「たくさんのふしぎ」1999年3月号）は作者の山内さんがおうちでアマガエルと出会い、一緒に暮らした14年間が描かれています。テレビが好きみたい、近所から聞こえてくる、大工さんのお金づちの音に反応して鳴きだしたり、目にも表情があるそうです。とにかく知らないことばかり、ぜひ読んでみてください。2003年ハードカバーになりました。



私は、アマガエルが好きなのであって、いわゆるヒキガエルの類はそれほどではありませんでしたが、この絵本に出合って気持ちが少し変わってきました。

その本は、『イボイボガエルヒキガエル』（三輪一雄 作絵 偕成社 2005）です。やはり巷では、私のようにアマガエルはかわいい、ヒキガエルは気持ち悪いというのが主流のようで、怒ったヒキガエルがアマガエルとヒキガエルを比較しながら、両者の違いを丁寧に解説してくれています。ヒキガエルは乾燥に強く、イボから毒を出して攻撃できる、もちろん弱点もあります。吸盤もジャンプ力もないので、深い溝に落ちたら二度と上がって来られない。関西弁の語り口が楽しくて、ヒキガエルもわるくない！

2008年の国際カエル年、井の頭自然文化園のイベントで見たトウキョウダルマガエルはとても品のある顔をしていました。

上記の山内祥子さんは「たくさんのふしぎ」2022年10月号『ヒキガエルとくらす』（山内祥子 文 沢野ひとし 絵 福音館書店）を出版されました。ヒキガエルのクロちゃんは18年生きましたよ。



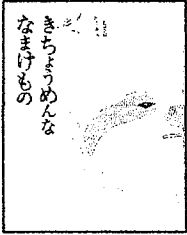
## 「夏休みにいかが」

個人会員 吉村悦子



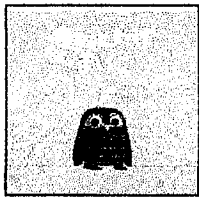
『コンビニエンスドロンプア』 富安陽子 文 つちだのぶこ 絵 童心社

夏にはやはり怪談、怖い話で涼しみましょう。いろんな妖怪が登場するコンビニが、開店するのは丑三つ時。おすすめは、ドロンプア・アイスに、ドロンプア・べんとう……。誰が何を買いに来るのでしょうか。



『きちょうめんなまけもの』 ねじめ正一 詩 村上康成 絵 教育画劇

なまけものって、あまり動き回らないイメージがありますよね。この絵本のなまけものは、よく動くんですよ、動物園が閉まってから。動くというよりトレーニングしてるんです。それも、きちょうめんに。



『ちょっとだけまいご』 クリス・ホートン作 木坂 涼 訳 BL 出版

迷子になったことがありますか。私はありますよ。2回は、はっきりと情景を覚えています。さて、フクロウの子が巣から落っこちて迷子になってしまいました。無事にお母さんの元に帰れるのでしょうか。



『あらまっ!』 ケイト・ラム文 エイドリアン・ジョンソン絵  
石津ちひろ 訳 小学館

夏休み、親戚の家にひとりでお泊まりに行くこともあるでしょう。主人公は男の子、お泊まり先はおばあちゃんの家。このおばあちゃんがパワフル。読み進めるうちに、「あらまっ!」の声がどんどん大きくなりますよ。



『ガンバレ!!まけるな!!ナメクジくん』 三輪一雄 作絵 偕成社

夏休みに生きものの進化を調べてみるのもおもしろいですね。ナメクジの祖先はカタツムリ、知りませんでした。長い年月をかけてカラを小さくしていった生きもの。涙ぐましい努力、子孫を残し続けるたくましさを感じました。でも、菜園で私を悩ますナメクジは、やっぱり好きになれません。ごめんね。



『さんねもと天女』 峰山町(現 京丹後市)羽衣絵本制作委員会 文  
栗田 美也子 絵 元峰山町発行

地域に伝わる昔話も楽しんでみましょう。これは京丹後市峰山に伝わる羽衣伝説と七夕伝説が合わさったおはなし。古くは、丹後国風土記にもあります。主人公のさんねも(三右衛門)の子孫にあたる家があり、七夕行事が伝えられているそうです。丹後には浦島伝説もあり、現地に行ってみたいです。

「読み継がれている我が家での名作」

もみじ文庫 ばあちゃん

「ばあちゃん、これ、読んで」と孫が保育園から借りて来た本を持ってきました。それは、なんと、私が30数年前に子どもたちに読んだ本。たびたび繰り返される孫たちと私の光景です。  
『こどものとも』の創刊は1956年なので、年代的には私自身も幼児期にわが子たちと同じ絵本を読めたはずなのですが、同じ絵本を読んだ記憶はありません。親子がそれぞれの幼児期に同じ本を楽しむ体験・・・私が羨ましく思っていることの一つです。孫たちが図書館や保育園で選んできた絵本を見て、娘は「これ、ママも好きやったよ。ばあちゃんちにあるはずよ。」と言います。そのころのドキドキ、ハラハラなどの感覚がよみがえって来ているかな？  
我が家で世代を超えて愛されている絵本の一部を紹介します。（「絵本の名作とは30年読み継がれること」とか。少なくとも、「我が家」での名作たちです。）

『わんぱくだんのたからじま』(1992年 ひさかたチャイルド)  
作: ゆきのゆみこ 上野与志 絵: 末崎 茂樹

当時3歳児組の娘が保育園からもらって来ました。「わんぱくだん」は、けん、ひろし、くみ、仲良し3人のグループ。3人で遊ぶといつも不思議なことが・・・砂場で海賊ごっこをしていると、突如大海原へ。海賊に出会い、怪獣に遭遇して・・・どのお話でも、絶体絶命かと思つた瞬間、元の公園の砂場に舞い戻る。夢かな?でも、誰かが必ず冒険でのおみやげを持ち帰っている。夢じゃない。本当の冒険だったんだ!先日は、図書館でシリーズの中の『わんぱくだんのスナバさばく』(2009年)を孫と楽しみました。

『わんぱくだんシリーズ』(第1作 1990年発刊  
最新第26作 2023年8月発刊)



『きょうはすてきなおばけの日!』(1992年ポプラ社) 作・絵: 武田 美穂



我が家のこの絵本は、愛されすぎたせいか、ボロボロになり、それでも昨秋、転居するまで本棚にありました。図書館で孫が選んだ時に、「ママが大好きやったよ」と告げると、その日も二度は読み語りました。

登校の際に会った女の子、おまわりさん、みどりのおばさんも、学校の先生たちも友だちも、みんなおばけ。帰宅したら、まさかの・・・お母さんもおばけ・・・で、結局、僕もおばけ。楽しい、びっくりするような結末。楽しさの中で、「怖がらなくてもいいよ、みんな同じ仲間なんだ」って教えてくれるのかな。

後日図書館で、「ママが好きやったあのおばけの本、また読んで」とせがまれました。

『どうぶつえんガイド』(1995年 福音館書店) 作・絵: あべ 弘士

各ページに動物たちの大きなイラスト、そしてその周りに小さなイラストと小さな文字の説明文。元・飼育員のあべ弘士さんの動物に対する愛情とうん蓄が詰まっています。読むだけで動物園を巡っているようで、まさしく『どうぶつえんガイド』です。

いつの間にかこの本は我が家の本棚から消え、娘宅にありました。手ずれしたページを見ると、部屋の隅に座り込んで読みふけていた娘の姿を思い出します。孫たちにも愛読されているのは間違いありません。



## 1 府立高校の図書館のカウンターより

生徒たちからのリクエスト紹介—私が出会っている高校生たちの揺れ

城野裕紀子

## 『あの花が咲く丘で君とまた会えたら』汐見夏衛 スターツ出版 2016

内容：母親と喧嘩した中学2年生の女の子が第二次世界大戦中の日本にタイムスリップ。そこで特攻隊員の青年と出会います。その後現代に戻った少女は、特攻資料館で遺品として展示されている青年の4通の手紙を見つけ、彼の少女に対する思いを知ることができます。



図書館で：SNSで生徒たちは知っていたようでしたが、紙の本で読みたいとリクエストがありました。京庫連会員のみなさまには予測できる設定の小説かもしれませんが、高校生たちには新しいもののようで、テンポがよいのでサクサク読めるようです。「内容知っていたのに、泣いた〜」「戦争を題材にしたのは硬い感じのものが多いけど、これやったらたくさんの人が読むんちがうかなあ」と戦争について風化させないことを大事に思っている生徒もいました。

## 『違国日記』ヤマシタトモコ 祥伝社 コミック 全11巻 2017~2023

内容：交通事故で両親を亡くした高校生の姪(朝)と彼女を勢いで引き取ってしまった人見知りの小説家の叔母(楨生)の同居譚。人と暮らすことに戸惑う楨生と自分の存在の足元がぐらついたままの朝が歩み寄っていきます。周りの人たちも個性的。作品は自己否定、同性愛、組織の呪縛、言葉の重み、自分探しなど多くのモチーフを絡めています。やりたいことが何もないことに凍えていた朝は未来を探しだす覚悟をします。



図書館で：1人の生徒が「みんなに読んでほしいんです！」と言って、すごい勢いで図書館にやってきました。「生きてていいんだ」「なりたい自分になりたい」「なりたい自分がわからない」「わたしはただ、わたしでいたい」など作品には彼女のところにささる言葉が溢れていたのかもしれませんが。彼女は「些細なことでも辛抱しないで怒ってもいいんだ」と思った。「『自分は孤立している』と思っている人が読んでくれたらなあ」と言っていました。

## 『スーパー・ポジティブ・シンキング』井上裕介 ヨシモトブックス 2013



内容：“結婚したくない芸人”“ブサイクなのにうぬぼれ男”第1位 NON STYLEの井上裕介氏がなぜどんな悪口にも心が折れないのか。世間の「嫌い」を「好き」にするためにどうしているかが書かれています。

図書館で：心がどん底にいて、何とかしたいから読みたい。とリクエストしてくれました。前に出てなんぼの芸能界で生きているからでしょうが、例えば「愛されたいからいろんな人と交流する」と書かれています。が、「いろんな人と交流していたら、周りの人たちから愛されていた」とは違う。私は計算づく、あざとさが気になり、高校生にはこんな方法を是として欲しくなく、学校での購入はお断りして、京都市図書館が所蔵していたので、そちらで借りてもらうようを案内しました。

本州最南端 潮岬 かんりん文庫の「秋のうれしい収穫祭」

田舎では、とれたてのお野菜や果物をよくいただきます。秋の初物が嬉しいですよ。

文庫には、最近小さなお友達が増えてきました。まだこども園に通う前の、2歳児さんのママ友たちの合言葉「水曜日はここでね」。こども園の年中さんも先生と一緒にぞろぞろ？やってきます。たった5人ですけどね。窓から「にゃ〜ご」でお出迎え。

・「さるとかに」神沢利子/文 赤羽末吉/絵 銀河社 昭和49年

大判の絵本で、迫力ある赤羽さんの絵が読み聞かせにぴったり。いたずらざるが投げた青柿が親がににあたると、ずくずく生まれた子がにたちも、がしゃがしゃ育て赤と緑で頼もしい。栗たちにあだうちされて、ざるの表情がころころかわるおなじみの昔話。

さるとかに



・「おいもほり」中村美佐子/作 いもとようこ/絵 ひかりのくに 2011年

地面の上と下でおいもひきをする、にわとりおばさんとねずみのおやこ。おたがい相手の顔が見えなかったけれど、最後に出会って大笑い、仲よく食べなきゃ。つやつやのおいもの表面を、思わずなでたくなるリアルさ。焼いて食べようか、煮て食べようか。



・「ナミチカ力のきのこがり」降矢なな/作 童心社 2010年

きのこって、きつとスーパーで袋に入っているのしか見たことがない子どもが多いのでは？大人だって「きのこがり」ってしたことないもの。ナミチカはおじいちゃとはぐれて、どんどん森の奥へと入ってしまいます。森の中で出会うのは、おばけ？ようかい？それとも、ようせい？森の住人はいつも人間と遊びたがっているようです。

あたらしい  
みかんのむきかた



・「あたらしいみかんのむきかた2」岡田好弘/作・神谷圭介/絵・文 小学館 2011

なんといっても、和歌山はみかんどころですからね。皮を捨てるなんてもったいない！でも本当にできる？と思い、チャレンジしてみました。線を引いてるときにはわからないけど、むくと、突然「目」が出て感動！極早生みかんで緑の作品も楽しいかも。

♪～猫はこたつで丸くなる～♪という季節ですが、元気な猫の絵本を4冊ご紹介します。



『スキーをはいたねこのヘンリー』 メリー・カルホーン文  
エリック・イングラハム絵 猪熊葉子訳  
リブリオ出版 2002 (佑学社 1989)

ヘンリーは後ろ足で立って歩ける猫。家族でスキーを山小屋へ行ったとき、おとこの子がヘンリーにも小さいスキーとストックを古い板で作ってくれました。でも雪の上をすべるなんて嫌ですね。ひよんなことからヘンリーは山小屋においてきぼりになってしまい、仕方なくスキーをはいて街へ向かってすべっていきました。

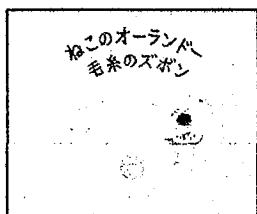
森でいろいろな動物に出会い、怖い思いをしながらひたすら家族の元へ急ぐヘンリーに思わずエールを送りたくなります。



『ハリーのクリスマス』 メアリー・チャルマーズ作 おびかゆうこ訳  
福音館書店 2012

クリスマスまであと3週間。ハリーはおかあさんとサンタさんをお願いしに行きます。「あかちゃんねこがほしい！」これは一大事。ハリーとおかあさんは、あかちゃんねこに必要な物を買って揃え、クリスマスの日がやってきました。

嬉しいことがいっぱいやってくる幸せな絵本です。



『ねこのオーランドー 毛糸のズボン』 キャスリーン・ヘイル さく  
こみやゆうやく 好学社 2022

猫のオーランドーはある夜、あやまって腰から下に油を被ってしまい、下半身の毛が抜け落ちてしまいました。おくさんのグレイスは、オーランドーの毛の色にそっくりな毛糸のズボンを編み、三匹のこねこたちはかわるがわるお話をしてベッドで憂鬱な日を過ごすオーランドーを元気づけてあげました。はちゃめちゃんなお話の最後は思わぬ展開になり、「おわりよければ、すべてよし」の1冊です。

以上の3冊はシリーズです。他の本も探してみてくださいね。



『ふゆねこさん』 ハワード＝ノッツさく・え まつおかきょうこ やく  
偕成社 1977

「ゆきだ、ゆきだ!」「さあ、ふゆがくるぞ!」茂みの中の猫にとっては初めての冬です。猫はこどもたちの家をながめ、夏の日の野原を夢見ます。

クリスマスも過ぎて益々寒さは厳しくなります。そしてついに……。

やさしいモノクロの線描でこどもたちと猫の交流を温かく描いた絵本です。

今年 2024 年は 12 支の辰年にあたります。辰年のシンボルである龍は想像上の動物ですが、昔話の時代から絵やお話にひんぱんに登場します。ちょっと怖そうだけど、かっこよくて、空を飛べて、とお話を通してりゅうの姿は伝えられてきました。実在の希少動物より、身近な存在かもしれません。

太田一子



『たつのこたろう』松谷みよ子/文 朝倉摂/絵 新装版 2010 講談社

1960 年に長編童話として書かれ、63 年には絵本や紙芝居の形でも発表された。信濃や日光の伝説、秋田の八郎瀧伝説などを取り入れたこの作品には、どこかで出会ってきたようななつかしさがある。

おとなになって読むと、龍になった母親が赤ん坊に自分の目の玉をさしだしてしゃぶらせ大きくしたというくだりが胸にせまる。『瓜と龍蛇』(福音館書店)には、『たつのこたろう』が下敷きにした民話をはじめ、龍にまつわるいろいろな写真も載っている。見ているだけで楽しくなる。



『エルマーのぼうけん』 1963 福音館書店

『エルマーとりゅう』 1964 福音館書店

『エルマーと 16 びきのりゅう』 1965 福音館書店

ルース・スタイルス・ガネットさく

ルース・クリスマン・ガネットえ わたなべしげお訳

原作は 1946 年から 1951 年にかけて出版されたが、

日本には 60 年代に入って紹介される。主人公は 9 歳の男の子とぬいぐるみのようなこどものりゅう。さしえは白黒なのに、描写がとてもカラフルで、遊園地のような色合いの世界にいるような気がしてくる。「龍と冒険」というテーマが、60 年を超えて読み継がれてきた理由の一つだろうか。



『まゆとりゅう』 富安陽子文 降矢なな絵 月刊こどものとも 2004 福音館書店

春が近づくと、山には生まれたてのりゅうのようなひとすじの雪形が現れ、雲に乗ってやってきたりゅうは春一番の大雨を降らせる。雪解け水を集めた谷川は、りゅうのように身をくねらせ、音をとどろかせて山を下っていく。縦横無尽に駆け回りりゅうの絵は力強く、龍神とよばれるのにふさわしい姿である。



『紫禁城の秘密の友達』(3巻) <sup>チャンイー</sup>常怡 作 小島敬太 訳 おきたもも 絵 偕成社 2022

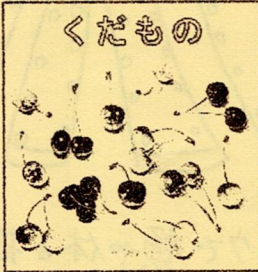
不思議なイヤリングを拾ってから、宮殿の屋根に並んでいる焼き物の神獣や、動物、草木と話ができるようになった 10 歳の女の子の冒険物語。龍をはじめ古代中国の創造の動物たちが今の時代に生きていて、活躍する話が各巻 10 話ずつ入っている。中国の奥深さがよくわかる。日本の夏祭りやトトロに出てくる歌も登場するところが、不思議な感じがするが、中国のこどもたちにはどううつるのだろう。



この3冊は、私が実際に子どもが小さなころに読んでとよく言われて読んでいた本です。最初はこどもを通して知りましたが、読んでいて私も大好きになりました。おとなの方にもおすすめしたい本です。

東本願寺文庫 泉阿弥華

『くだもの』 平山和子作 福音館書店 1981



優しくてあたたかい絵で描かれた本物のように美味しそうな果物がでできます。丸のままの果物、その後には切ったり剥かれたりして出てくる果物。「さあ、どうぞ」と渡される果物に、読み手も子どもも思わず手を伸ばしパクパク。たくさんの果物を見て楽しみながら旬の果物が食べたくなる。そのような絵本です。

『はじめてのおつかい』 筒井頼子作・林明子絵 福音館書店 1977

主人公みいちゃんのはじめてのおつかい。みいちゃんのドキドキ感と頑張る姿が伝わってきて応援したくなる絵本です。特におすすめは中に描かれている遊び心ある絵の内容です。そのような場面にいくつ気づけるか、いや、まだ探しきれない場面があるのかもしれない！？と、読むたびに絵の中を探してしまう楽しさとワクワク感もあるおすすめの絵本です。



『せんたくかあちゃん』 さとうわきこ作・絵 福音館書店 1982

洗濯が大好きなかあちゃんがいろいろなものを洗濯していきます。洗濯するものがなくなったところに、干されたおへそをとるために登場した雷さまもなんと洗濯されてしまいます。展開のおもしろさとテンポよく進む内容に豪快なかあちゃんの魅力。そのようなかあちゃんと雷さまのやりとりに声を出して笑ってしまいます。

